
とある都市の事象選択《オールセレクト》

ITEM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市の事象選択
オールセレクト

【Nコード】

N7279X

【作者名】

ITEM

【あらすじ】

学園都市にある少年がいた。学園都市第二位の垣根帝督、“幻想殺し” 上条当麻を親友に持つ彼はある問題を抱えていた……。それは彼が人知を越えた力を持っていること。この小説は中二病にご都合主義、さらには主人公はほぼ無敵ときていきます。それでもokと いう方はどうぞ暖かい目で見守ってください。

プロローグ(前書き)

祝初投稿です?なにとぞよろしくお願ひします?

プロローグ

『窓のないビル』

その建物は高層ビルが多く建ち並ぶ学園都市第7区に建っている。その名の通りにその建物には窓がない、それどころか中に入る入り口すら見られない。この異様な建物こそ学園都市のトップ、統括理事長アレイスター・クロウリーの根城である。

特殊な液体で満たされた培養器の中で逆さに浮いており、大人にも子供にも男にも女にも見える容姿を持つ学園都市統括理事長の前に、一人の少年がズボンのポケットに手を入れながら立っていた。重苦しい空気を打破するかの様に少年が口を開いたことから物語は始まる。

第一話（前書き）

第一話完成したんで投稿します〇（＾　＾）〇　早くも中二病満載
ですね（＜　|　＞）

第一話

「いー加減人の夢の中に現れんのやめてくれねエ？寝起き悪いし寝不足になるし最悪なんだけど？」

黒をベースとしたパジャマに身を包み、左右違った色の瞳を持つ鮮やかな茶髪の少年^{かみき} 神鬼大和は悪態をつく。

「君の夢に現れたのは君に用があるからだ。」

「当たり前だボケ。用もねエのに出てきたらブツ殺すぞ。」

まアコイツが夢に現れるのはよくあることだし、もう慣れた。ハアとため息を付くと大和はアレイスターに用件を聞く。

「で？何の用だ？どうせ仕事だろ？さっさと内容話して消えろ。」

「仕事は仕事だか君が思っている様な内容ではないぞ。」

「あア？どオゆう意味だそれ？いつもの掃除じゃねエのか？」

掃除と言つのは学園都市の暗部用語の一つで殺しや破壊活動のことを指す。

「君には柵川中学という学校に通ってもらおう。」

「・・・悪いもつかい言ってくれや。」

「何度でも言おう、君には柵川中学という学校に・・・消える力ス」

続きを聞きたくなかった大和はアレイスターの言葉の上に言葉を重ねる。

「酷いな。君がもう一度言えと言うから言ったのに・・・」

「ふざけんじゃねエぞコラ？何でオレがんなことしなきゃなんねエんだよオ？今更学校に通えだア？小学校に通わせなかつたのはどこのどいつだア？」

「説明は最後まで聞きたまえ。何も君に青春を謳歌してもらおう訳ではない。」

「ますます意味わかんねエよ。その学校の先コーでも殺すのかア？」

「その学校に近々二人の少年が入学してくる。名前は垣根帝督、上条当麻だ。」

「それがどオした？」

「彼らはいずれ私のプランに大きく影響する者たちだ。頭の回転が早い君ならもうわかってもらったと思うのだが？」

「オーケーオーケー理解したよ。つまりアレだなアソイツらと同じ学校に通いつつ護衛と監視の両方やれってことだなア？」

「理解が早くて助かるよ。」

なるほど護衛と監視か。それなら学校に通えというのも何とか納得できる。だが、ここで一つ疑問が生まれる。アレイスターに質問しようかと思っただがどうせプラン関連の質問には答えてくれないと思っただけでやめておいた。

「因みに垣根帝督は近い将来、学園都市の第二位となる者だ。君の手に負えるかな？」

アレイスターは嫌味にも聞こえる質問をしてくる。だが大和はそんなこと気にすることもなく吐き捨てる。

「誰に言っただア？未来永劫オレに勝てるヤツは存在しねエよ。」

第二話（前書き）

第二話できました〇（＾　＾）〇 駄文ですみません（＜　|　＞）

第二話

突然言い渡された学校通学命令という最悪の夢から目覚めた大和はポリポリと頭を搔く。

アレキスターが言うには入学式は二日後、入学に必要な手続きや入学後の教科書などはこちらで用意することだ。

と言ってもすでに学園都市最高クラスの頭脳を持つ大和には必要ないもののだが、形だけでも揃えておかなければ不審に思われるかもしれない。

(とりあえず今何時だ?)

時間を確認するため大和は枕元にあつた携帯電話を開ける。

現在時間 AM 8 : 48。

普通に学校に通つてる者なら遅刻確定の時間だが学校に通つていない大和からすればかなり早い時間だ。

(二度寝つて気分でもねエしなア・・・ちイとばつか早エけど起きるかア)

ベッドから身を起こすと顔を洗うために洗面所へと向かう。大和の自宅でもある学生寮は学園都市の中で一、二を争う大きさを持つ。アレキスターからプレゼントなのだが、一人で住むには広過ぎるため大和からすれば普通の学生寮の方が良かったのだ。

顔を洗い、歯を磨き終わると大和はコンタクトレンズを付け始める。別に大和の視力が悪いのではなく、ある理由からコンタクトレンズを付けているのだ。

(腹減つたなア・・・自分で作んのもメンドオだしファミレスでも

行くか・・・)

ファミレスで朝食を摂ることにした大和は素早く服を着替え、身支度を整えると学生寮を後にする。

学校の登校時間が過ぎたこともあってか歩く人の数は少ない。本来ならこの時間に学生が出歩いていることがおかしいのだが、そんなことどこ吹く風と言わんばかりの堂々とした態度で大和は歩く。いつも通りに近道として使っている路地裏を通っていると何やら人らしきものがうずくまっていた。

(何だこりゃ？人か？)

近くで見ると、それは小さな女の子だった。見たところ髪も乱れているし、着ている服もボロボロだ。出来れば面倒事は避けたい大和だったがほっとく訳にもいかないのでとりあえず声を掛けてみた。

「おい？大丈夫かア？生きてるかア？」

「・・・ん、此処は・・・？」

意識はある、どうやらまだ生きてはいるみたいだ。

「お前、いくら夏だからってそんなカツコで寝てたら風邪引くぜ」

「・・・超ほつといてください あなたには関係ないことです」

せつかく声掛けてやったのにこれかよ。普段ならこのままほっておくのだが今日ばかりは何故かそんな気にならなかった。

「まアそう邪険にすんなよ お前朝メシは食ったかア？」

「いえ・・・まだですけど・・・」

「じゃ丁度いいやゝ今から朝メシ食いに行くからお前も一緒に来い」
そう言つと大和は少女の腕を掴み半ば強引に引つ張つて行つた。

「えっ？ちよつと！！何処連れて行くんですか！？」

「いらつしやいませ！何名様ですか？」

ウェイトレスの元気な挨拶が二人を出迎える。若干少女のカッコを見て顔をしかめたがすぐにいつもの営業スマイルへと戻す。

「二人 できれば奥の席を頼む」

あまり人の目に付く席は好きではない大和はいつも通り奥の席を指定する。それに少女のこともあるのでなおさら奥の方が好都合だ。時間が時間なだけに店の中にはほとんど客はおらず、希望通りに奥の席へと案内された。

「ほらよ、メニユーだ 好きなもん頼め オレが奢つてやるよ」

少女にメニユーを渡しながら大和は言う。少女はまだどこか警戒している様だが、小さな声でありがとつございませうと言つとメニユーを受け取る。

少女にメニユーを渡したところで改めて大和は少女を見つめた。

（歳は・・・大体小学生高学年ぐれエか？見たところ学校に通つて

る感じはしねエな　にしてもコイツ・・・)

間違いない、コイツは裏の人間だ。大和は同じ裏の人間としての直感でそう推定した。長年学園都市の暗部として活動していたためか、表の人間か裏の人間かは直感でわかる様になっていた。あまり嬉しいものではないが・・・。

「あなたは決まりましたか？」

少女が大和の顔を覗き込む様に尋ねてくる。大和がファミレスで朝食を摂る時は決まってサンドウィッチを注文する。

「あア大丈夫だ　とりあえず注文すつか　すみませうん」

一通り注文し終わると大和は本題を切り出す。

「お前何があつた？ただあそこで寝てた訳じゃねエだろ？」

「あなたには超関係ないことです」

やっぱりこうきたか・・・まア仕方ねエかア

「お前裏の人間だろ？」

その言葉に少女は手に持っていたコップを落としそうになる。

「どっとうしてそのことを!？」

「ダメだなア　そんなに動揺しちまったらバレンだろ？まアそんな

ボロボロじゃせいぜい下つ端だろオがな」

まるで自分も裏の人間ですと言わんばかりに話す大和。事実大和はアレイスターの右腕として暗部に君臨している。

「まアいい、まだ名前聞いていなかったなア お前名前は？」

「絹旗・・・絹旗最愛です」

「じゃ絹旗、何があつたんだア？そのカツコじゃかなり過激な仕事だつたみてエだなア」

再度尋ねてみるが絹旗黙り込む、やはりまだ警戒しているのだろうか中々話そうとしない。

（つたくメンドクセエヤツだなア・・・まアでも一度乗つちまった船だ、最後まで面倒見てやるかア）

「絹旗、警戒してんなら安心しろ オレもお前と同じ裏の人間だ それもお前なんかよりもずっと深いところにいるな」

絹旗の顔に驚きの色が浮かぶ。それもそのはずだ。いきなり声を掛けてきた少年が自分も同じ裏の人間ですと言うのだから。

「だから安心して話せ 少なくともオレはお前の思っている様な裏の人間とは違エから」

その言葉に安心したのか、それとも緊張の糸が切れたためか何時の間にか絹旗の目には涙が浮かんでいた。別に泣かすつもりはなかったのだが・・・。

「そうですね あなたになら話しても大丈夫みたいです。」

そう言って緇旗が話し始めようとした時だ、ファミレスにはおおよそ似合わない全身黒尽くめの男が数人、二人の席の前に立っていた。

第三話（前書き）

第三話完成！相変わらずの駄文

第三話

全身黒尽くめに見るからに屈強そうな体格と、ファミレスにはおおよそ似合わない数人の男が大和と絹旗が居る席の前に立つ。

「何だテメエら？朝メシの邪魔なんだよ さつさと消える」

「君に名乗る必要はない 朝食の邪魔をしたなら謝ろう 用が済めばすぐに消える」

そう言うと男は大和の前に座っている絹旗を睨みつける。

「こんなところに居たのか被検体E-57、戻るぞ まだスケジュールが詰まっている」

男は絹旗の腕を掴むと無理矢理連れて行くこととする。だが、絹旗も必死に抵抗している。それな身体も小刻みに震えている。

(ああなるほどなア そおゆうことか・・・)

一連のやり取りを見て大和は絹旗に何があつたか理解した。おそらく絹旗は置き去り(チャイルドエラー)か何かでコイツらに無理矢理裏の仕事をやらせられていた。それに絹旗のことを名前ではなく、被検体と呼んだ。どうせ訳のわからない実験も強要されたのだろう。

(仕方ねエ、助けてやっかア)

「オイ、オレは今コイツとメシ食ってんだよ 朝メシの邪魔して申し訳ねエと思つてんだつたらさつさと消えてくんねエかなア？」

「ああ！？テメエ誰に口聞いてやがる!？」

男の言葉が先程までの丁寧なものから一転して乱暴なものに変わる。だが、大和は臆することなく言葉を続ける。

「テメエに言っただよクソ野郎 それとも何か？言葉が理解できねエのかア？脳ミソまで筋肉で出来てんのかア？」

ヘラヘラと笑いながら大和は男をバカにする。さすがに男も我慢の限界が来たのか、その屈強な腕で大和の胸倉を掴むとそのまま持ち上げてしまう。

「このクソガキ！！調子に乗りやがって！！」

腕を大きく振りかぶると大和の顔を殴りつける。男の拳は綺麗に大和の顔に入った。中学生が大人に本気で殴られたら普通は泣く、泣かなくとも痛がるはずだ。

「おーおー中々いいパンチだなア 是非ともボクサーへの転職をオススメするぜ」

殴られたはずの大和は泣くどころか、痛がる素振りすらも微塵も見せない。まるで何事もなかったかの様にケロっとしている。その光景に殴った男はもちろん、その様子を間近で見ていた絹旗や他の客店の従業員も驚いていた。

「てっテメエ・・・何でくらってねエんだよ!？」

「あア？簡単だ、今テメエがオレを殴ったっていう“事象”を“拒絶”しただけだ つまりオレがテメエから殴られたっていう事実は存在しなくなる」

大和の隣を歩きながら絹旗は尋ねる。さっきの光景を見る限り大和は明らかに能力者、それもレベル4以上の大能力者クラスの……。

「その“あなた”ってのやめてくんない？ 気持ち悪くてかなわねエんだけど」

「私はあなたの名前を知りません」

「あれ？ まだ言っただけじゃなかったかア？ 神鬼、神鬼大和 大和って呼んでくれや」

「では改めまして大和さん、大和さんは能力者なんでしょうか？」

出来れば能力を使わずに追い払えば良かったのだが思わず能力を使ってしまったので、もう言い逃れはできない。仕方ないと思って大和は自分の能力を絹旗に説明することにした。

「お前の言う通りオレは能力者だ 神鬼大和、レベル5の《事象選択》（オールセレクト）だ」

「れっレベル5なのですか！？」

「ハア、だから言いたくなかったんだよ……レベル5って言ったら騒がれるから……」

「普通騒がれますよ！ と言うか騒がない人なんていませんよ！」

「同じレベル5なら騒がないんじゃないやねエ？」

「そっそれはあり得ますね……」

『レベル5』 それはこの街に住む学生にとって憧れの、同時に畏怖の対象となる存在。一人で軍隊相手にケンカを売れるレベル5は自然に多くの憧れを生む。だが、それだけでは済まないのがレベル5だ。憧れは同時に嫉妬の感情を生む、強過ぎるその力は恐怖の対象ともなる。

『化け物』

大和も幾度となく、そう呼ばれた。そう揶揄されても仕方がないのは大和自身が一番良く理解している。

「大和さん！聞いてますか!？」

どうやら思考の渦にはまっていたようだ。絹旗が自分に向かって何やら避けている。

「悪い悪い、ちイと考え事してたわ で？何だ？」

「大和さんのその・・・《事象選択》ってどんな能力なのですか？」

「オレの能力はこの世の全ての“事象”、簡単に言えば起こった出来事に対して選択できる力だ」

「うーん・・・よくわかりません」

「例えば・・・さつきオレが殴れた時、ケロっとしてただろ？あれは『殴られた』って事象を『殴られなかった』っていう事象に変えただけだ」

「とんでもない能力ですね・・・」

「それは自覚してる でも無敵って訳じゃねエからなア」

「あの最後の蹴りも能力によるものですか？」

「あれは・・・また別のもんだ、あれに関しては深くは聞くな」

大和はこれ以上の散策に釘を打つ。それ以上は学園都市の闇に繋がると思ったからだ。絹旗も裏の人間だが、まだ表に近い闇だ。大和のいる世界は一寸先も見えないぐらいの深い闇、関係のない者を巻き込む訳にはいけない。

「お前、これから行く当てでもあるのか？」

話題を変えるために大和はふと思いついた質問をする。

「いえ・・・私は置き去りですから行く当てなどありません・・・」
「なら、暫くオレの家に来い 知り合ったのも何かの縁だ、面倒みてやるよ」

絹旗はポカンとした顔している、理解が追いついていないのだろうか。だが直ぐに我を取り戻すと困惑した表情を見せる。

「いいのですか・・・？」

「別に構わねエゼ 丁度広過ぎるから困ってたんだよ」

「では、お世話になります・・・」

こうして、少年と少女の奇妙な同棲生活が始まったのだった。

第四話（前書き）

話しが全く進まない（^| ^ ;）

第四話

絹旗とも同棲生活が決まった日の夜、大和はアレイスターに呼び出されていた。どうせ今朝のことだろうと、大和はこれから聞くことになるだろうアレイスター統括理事長様のお説教にげんなりしていた。

因みに、絹旗は家に着くと直ぐに寝てしまった。大和としては彼女の衣類や下着を買いに行くつもりだったのだが無理に起こすのも気が引けたので、そのまま寝かすことにした。

(アレイスターの野郎も一々細けエヤツだなア あれぐらい見逃してくれてもいいじゃねエか・・・)

そんなことを考えている内に『窓のないビル』に辿り着く。それを見計らったかの様に案内人が現れる。

「また何かやらかしたのですか？大和君」

「ちいとばつか能力使って暴れただけだ、別段騒ぐことでもねエよ」

「君の場合ちよつとでは済まないでしょう・・・」

「うるせエな、さつさと中に入れろや こっちは今から聞くお説教にテンション最悪なんだよ」

さつさと終わらせて家に帰りたい大和は案内人に中に入れるよう急かす、案内人にも早くしたいのかこれ以上は何も言わず大和を中へと案内する。

中に入ると直ぐにアレイスターの前に立つ。表情をほとんど見せないアレイスターだが、その顔が呆れた表情を見せている気がするの
は気のせいだろうか。

「あれ程往来で力を使うなど言っているのに・・・どうやら馬の耳に念仏のようだな君は」

やっぱり怒っている。いや、呆れているのかもしれない。いずれにせよ大和にとつて面倒な状況であることには変わらないのだが。

「仕方ねエだろ？能力使わなきゃオレがKOされちまってたよ」

「私が言っているのは能力の使用についてはない・・・“聖人”の力を使用したことについてだ」

“聖人”という単語に大和はピクリと反応する。・・・やっぱりバレたか、恐れいるよアレイスター様。

「聖人は本来なら魔術側の所有物だ、なのに君は能力者でありながら聖人の力をも持つ。これが魔術側に漏れれば何かしら問題へと発展する。君とて厄介事は避けたいだろう？」

「・・・・・・・・」

「その上君の場合はそれだけでは収まらない。君の持つ力は科学と魔術を根底から覆してしまうものだ」

「アレイスター」

そこまで言つとようやく大和が口を開く。大和がアレイスターを見る目には明らかに敵意の色が浮かんでいた。

「オレは確かにお前の右腕だ、だが犬にまで成り下がった覚えはない。お前の憂いを晴らすためにオレは存在する、お前はオレの起こした問題を解決するために存在する、違うか？」

目だけではなく、その言葉にも敵意が含まれている。元々大和は人の言つ事を素直に聞く人間ではない、それが統括理事長であっても

だ。

「つまり協力はする、だが命令は聞かない、そういうことか？」

「そオゆうこつた、あの時から何一つ変わらねエスタンスだ 科学てか魔術とかがどオなるうが知つたこつちゃねエ オレの障壁になるんだつたらブツ潰すだけだ」

最後に大和は何か言おうとしたが何も言わなかった。だがアレイスターには大和が何を言おうとしたかはすぐにわかった。

邪魔するならお前も容赦はしない、と。

「もオいいだろ？さつさと家に帰らせろ、365日24時間逆さで浮いてるだけのお前と違って疲れてんだよ」

大和は回れ右をして案内人呼び出そうとする。

「では最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんだよ？」

「君は自宅に少女を連れ込んでいるようだが、まさか君はそういう趣向の持ち主なのか？」

「紛らわしい言い方してんじゃねエ！！！！！！誰かに勘違いされんだろオがア！！！！！！あとオレはロリコンじゃねエ！！！！！！

！」

「君がお望みと言うならもっとその気になる環境を提供するが・・・

」

「人の話しを聞けエエエ！！！！その気になるってどんな環境なんだよオオオオオ！！？」

先程までのシリアスな雰囲気を持ち壊すかの如く、大和の怒声が窓

のないビル内に響いた。

「やれやれ、彼を怒らせてどうするつもりですか？本気で怒らせれば一番困るのは貴方でしょう」

大和を外へと送り、戻って来た案内人は上司であるアレイスターにため息を吐く。

「彼が暴走しても君なら彼を止めることができるだろう？」

「冗談言わないでください 彼とまともにやりあってタダで済む訳ないでしょう・・・」

案内人は今日何度目になるかわからないため息を吐く。こんなことが毎回毎回続いていたら、胃が保たない。そろそろ本気で転職を考えそうにもなる。

「よろしいのですか？彼をほっておいて、あの様子では“聖人”の力だけでは済みませんよ？」

「それだけの利用価値が彼にはあるということだ」

アレイスターはニヤリと微笑む。一見優し気な微笑みに見えるが、アレイスターという人物を知る者が見れば邪悪な微笑みと感ずるだろう。

「彼の起こす問題など利用価値に比べれば微々たるものだ、例え魔術側と戦争になろうとも彼に勝る者など存在しない」

「まアそれは言えてますね、魔神クラスの魔術師でも引つ張って来なければ話しにすらなりませんしね」

アレイスターとしても戦争というのは最後の手段だ。仮に科学と魔術の間で戦争が勃発すれば学園都市もタダでは済まない。当然大きな被害も出るだろう。だがどんなに大きな被害が出ようが、学園都市の敗北はあり得ない。これだけはアレイスターは確信している。彼がいる限り、神鬼大和という名の最終兵器ファイナルウェポンがこの街に存在する限り……。

「プランはこれまで通り継続する」

「……彼の邪魔が入るかもしれませんよ？」

「何も問題はない 彼の妨害もプランの一部なのだから……」

だが、アレイスターはまだ知らない。彼がそのプランを叩き潰そうとしていることを。

そして、彼は知らない。自分自身がそのプランであることを……。

第五話（前書き）

次話からかなり時間が飛びます（汗）
後先考えなかった結果がこ
れです

第五話

「ふわアゝ眠みイ　こりゃア明日も寝不足確定コースだな」

窓のないビルから脱出（？）した大和は一人学園都市の夜道を歩いている。普段ならこのまま自宅へ帰るのだが、一つやり残したことがあるので、自宅のフカフカベッドへダイブはまだお預けだ。

大和はポケットから紙を取り出す。その紙にはとある研究所への地図が書かれていた。

（さてと、帰る前に一仕事すつか・・・）

地図に書かれている場所を確認すると、大和はニヤリと顔を歪ませる。

「「ゴミ掃除」といくかア　クソ野郎共」

「何イ！？取り逃がしただと！？貴様らはガキ一人連れ戻すことすら満足にできるのか！？」

「申し訳ございません・・・」

白髪の老人が屈強な男数人に怒鳴りつける。老人は白衣を着ているのでおそらくは科学者だろう。

傍から見ればかなりシニールな光景だが、この研究所の所長と部下という設定を加えれば納得もできる。

「しかし所長！邪魔が入ったのです！仲間も一人そいつにやられて・
・・」

必死に男は弁明をするが、老人はさらに怒鳴りつける。

「聞けばその邪魔とやらもガキだったそうじゃないか！ 大の大人
がガキに負けるとはどうなっておるのだ!？」

「いいやジイさん、そいつらは悪くねエぜ 相手がオレじゃ仕方ね
エよ」

何処からともなく声が聞こえたかと思うと、突然凄まじい轟音がな
り後ろのドアが破壊される。
破壊されたドアから誰かが中に入ってくる。

「こんばんは、お前ら全員殺しに来たぜ」

緊迫した空気には似合わない明るい子供の声が聞こえたかと思うと、
その声の主である神鬼大和が堂々と部屋の中に入ってくる。

「貴様何者だ!?!どうやって研究所に入ってきた!?!」

老人が鬼の形相で尋ねるの対し、大和は八二カミながら答える。

「そんなの正面突破に決まってるだろ？ わざわざコソコソと侵入
する必要なんざねエからなア あっ因みに他のヤツらは既にご臨終
だア あとはテメエらだけだから」

「所長!!!こいつです!!!こいつが今朝オレたちの邪魔をしたヤツ
です!!!」

「ん?テメエら今朝のクソ野郎の残りカスかア?あー残念だけどテ

メエらのお仲間はくたばつてたわア！ 一応急所は外したんだけど即死だったみてエだわ 安心しろ、死体はちゃんとゴミ箱に捨てたから」

何が可笑しいのか大和はゲラゲラと笑いながら目の前の標的にゆっくりと近づいて行く。

その目は獲物を狙わんとする野獣のそれだ。ただの野獣ならまだよかったのだが、彼らの前に居るのは学園都市最強の野獣だ。

「さアて今から三秒だけやつからその間に神サマにでもお祈りするんだなア テメエらみてエなゴミでも最期ぐれエは応えてくれるかもしんねエぞ？」

「随分と勝手な事を言ってくれるな小僧、此処は科学の街だ 神頼みをするなどナンセンスだ それに……死ぬは貴様だ小僧！！」

叫んだのと同時に老人は一気に奥のドアへと走る。

「お前たち時間を稼げ！！私はアレの準備をする！！」

(時間稼ぎ、あのジジイ何かする気だな それに去り際に言ったアレってのも気になる……)

大和としては直ぐにでも後を追いかけていたが、アレイスターからは皆殺しにするようにと指示を受けている。大和は最初から皆殺しにする予定だったので問題は無い。とりあえず目の前にある障壁から片付ける事にする。

「オレ相手に時間稼ぎったア面白エ 果たして何秒立ってられっかなア？」

悪魔の様な笑みを浮かべて学園都市最強の怪物が今狩りを再開する。

「何なのだあの小僧は！？一体どうなっている！？」

ある物の準備をしながら白髪の実験者は叫び続ける。少なくとも此処に来るまで30人は居たはずだ。それをあの小僧は皆殺しに言った。あり得ない、高々中学生ぐらいの子供がそんなことできるなど。

だが、こちら側には切り札がある。まだ試作段階だがその威力は置き去りを使った実験で確認済みだ。勝てる、絶対に。そう確信した時だった。

「よオジジイ、準備とやらは終わったかア？」

先程の様にドアを破壊する事なく大和が絶望と共にゆっくりと入って来る。意地悪そうな笑みを浮かべながら。

「貴様・・・先程のヤツらはどうした？」

「あアあんなヤツらで時間稼ぎ出来るとでも思ってたのかア？舐めてんじゃねエぞコラ」

首をコキコキと鳴らしながらとんでもない事をサラリと言っただけ。見たところ傷どころか汚れ一つない。

一体この小僧は何者なのだ？

ますます疑問が生まれる。

「随分と強い者のようだな　だが貴様もここまでだ」

白髪の研究者は白衣から何かを取り出す。それは何かのスイッチのようだ、アレというのはこれの事だろうか。

「何だそらや？爆弾でも爆発させるのかア？無駄だから止めとけ、
テメエだけ吹き飛ばぞ？」

「ふん、科学者たる私が爆弾なんぞ物騒なもの使うと思うか？爆弾
なんかよりも強力なものじゃ」

そう言うと白髪の研究者はスイッチを押す。

キイイイイイイインと甲高い音が鳴ったかと思うと突然の頭痛が
大和を襲う。

「テメエ・・・何しやがった？」

「こいつはキャパシティダウンといって能力者に反応する装置だ
その様子を見る限り貴様は高能力者のようだな」

「・・・」
「どうした小僧？さっきまでの虚勢は？あまりの苦痛に言葉もでん
のか？」

白髪の研究者は自分に酔ったかの様に言葉を続ける。

「アハ、アハハハハハハハハハ！！！！こいつは傑作だア！！」

何か切れた様に大和は突然大声で笑い出す。何かに操れているか
の様に、いつまでもいつまでも。

「何故だ・・・？何故キャパシティダウンが効いていない!?」

「バカだろテムエ？そんなもんで勝てるとも思ってたのかよオ？抱きしめたくなくなるぐれエ哀れだぜテムエ」

ようやく笑い終えたのか大和はゆっくりと話し始める。

「何で効かねエのか？簡単だ、そのキャパシティダウンとやらの音を聞いたつつう事象を拒絶しただけだ」

「事象を拒絶しただと・・・そんなこと出来る訳が・・・!?」

ジジイが何かに気付いたのか、その顔がみるみる内に青ざめていく。

「まさか貴様、“事象選択”か!？」

「ようやく気付いてくれたかよ、気付いてくれたお礼に最高にキツイ死をプレゼントしてやる」

そう吐き捨てるのと大和はゆっくりと白髪の実験者に近く。研究者は逃げようとするが素早く前に回り込むと、動けない様に両足を骨を砕く。

「ギヤヤヤアアアア!!!????」

激痛のあまりジジイは大声で悲鳴をあげる。痛みからか、それとも恐怖からその目には若干涙らしきものが見える。

「待ってくれ!!!わしを殺してみろ、貴様統括理事会から睨まれるぞ!!!」

「ああ?どオいう意味だそれ？」

「キャパシティダウンを製造するように頼んだのは他にもない、統括理事会だ!!!」

「!？、……なるほどなア」

「わかったか？わかったなら早くわしを……」

それ以上言葉が続くことはなかった。何故なら大和がさっきの男から奪った銃で頭をブチ抜いたからだ。

さっきのジジイの言葉で大和はこの仕事の本当の目的を理解した。

（最初から妙だと思ったんだ　こんなクソみてエな簡単な仕事何でオレにやらせたのか……）

今回の仕事はただの研究所の破壊と研究員の皆殺し、規模の大きい研究所ならまだしも、大して大きくもないこんな研究所の掃除に学園都市最強の戦力を使うこと自体がおかしいのだ。

（アレイスターのヤツ……オレを実験台に新兵器キャバシテイダウンの性能を試しやがったな!!）

あの研究者は最期にキャバシテイダウンは統括理事会の命令で製造したと言った。統括理事会が下した命令をそのトップであるアレイスターが知らない訳がない。

つまりアレイスターは対能力者用の新兵器があるのをわかって大和に仕事を命じたのだ。

（事前情報がいやに少なかったのも、オレを実験台にするためと考えりゃ合点がいく　絹旗のことに関してもとやこや言わなかったのも全てはこれに繋げるためか……）

クソったれが

大和は歯軋りをし、怒りを露わにする。

利用されたことに怒りを感じている訳ではない。今に始まったことではない。元々大和とアレイスターはお互いを利用し合う関係ではないのだから。

大和が気に食わないのはこんな安い仕事、新兵器の性能の確認という仕事に学園都市最強の存在である自分が使われたことだ。

（面白エじゃねエかアレイスター　テメエがその気ならこつちも利用させてもらうぜ　今にテメエのそのツラ真つ青にしてやつから覚悟しろよ！！）

そう決意すると大和は研究所を後にした。獰猛な笑みを浮かべながら……。

「理事長、大和君からの報告です　研究所は完全に破壊、関係者は全員始末したとのことです」

報告を聞くとアレイスターは満足そうな笑みを浮かべた。

「よろしかったのですか理事長？あのような内容の仕事を彼にやらせて　随分と御立腹でしたよ」

「今回の件は彼でなければならなかったのだよ　その辺の雑魚を使つたところで新兵器の性能を確かめられなかったのですね」

「満足のいく結果は得られたのですか？」

「もちろんだ、お陰で素晴らしいデータが採取出来たよ」

理事長は何か得たものがあつたのだろうか？案内人からみれば対能力者というのが売りの新兵器が能力者の大和に簡単に突破されたと

いう欠陥しか見出だせなかつたのだが。

「・・・新兵器は見事に大和君に突破されましたが？」

「彼があ程度の物で屈するはずがないだろう？私が見たかったのは新兵器の性能もだが、あの環境下で彼がどの位闘えるか見たかつたのだ」

「・・・それ彼が知つたら間違いなく殺されますよ理事長？」

「その心配はないよ 私が死ねば一番困るのは彼自身だ」
「・・・」

全く理事長には恐れ入る。殺されることは絶対ないとわかっているからこそ、ここまで彼を利用出来るのだ。

仮に大和が理事長に牙を剥いても何かしらの策が有るのだろう。

一体彼と理事長の駆け引きにいつまで付き合わされるのだろうか・・・。

新たな始まり（前書き）

宣言通り、時間がかかなり飛びます（汗）
本格的に飛ぶのは次話からですが（汗）
何卒ご勘弁お願いします

新たな始まり

学園都市

東京の西部を切り崩して開発された街であり、学園の名が示す通り総人口230万人中8割が学生というまさに学生のための街。

「記憶術」だの「暗記術」という名目で超能力研究、即ち「脳の開発」を行っており、それに伴ってか科学技術もブツ飛んでおり、「外」の技術とは約20年程の差があると言われている。

そんな学園都市だが朝は『外』と同じ様に訪れる。

「学校だるいなア〜」とか「今日サボっちゃおうかなア〜」と学生が思う考えるのも、同じく学園都市も変わらない。

どの世界にいて基本的に朝はダルい、憂鬱なのである・・・。

「大和さ〜ん！！超起きてください！！朝ですよー！！！」

そんなモヤモヤを吹き飛ばすかの如く、元気な声が学園都市のとある学生寮に炸裂した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7279x/>

とある都市の事象選択《オールセレクト》

2011年10月21日11時00分発行